

2025年度 一般選抜問題  
前期C日程 2025年1月28日(火)

## 選 択 科 目

(数学・基礎理科・物理・化学・生物・日本史・世界史・国語)

数 学	1～ 6ページ
基礎理科	7～ 30ページ
※2科目選択して1科目の扱いとなります。	
物 理	31～ 44ページ
化 学	45～ 58ページ
生 物	59～ 75ページ
日 本 史	77～ 87ページ
世 界 史	89～102ページ
国 語	103～117ページ

### 注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 3科目型の受験生および3科目型と2科目型を併願する受験生は上記の科目から2科目を、2科目型の受験生は、上記科目と英語から2科目を選択してください。但し受験票に記載された科目以外を受験すると0点となります。
3. 解答用紙には、「**数学**」(青色)と「**基礎理科**」(赤色)と「**数学・基礎理科以外**」(赤色)の3種類があります。
4. 試験開始後、解答用紙に受験番号と名前を必ず記入し、受験番号をマークしてください。数学以外の科目については、解答する科目を選び、科目の右にマークしてください。また解答科目欄に科目名を記入してください。正しくマークされていない場合は0点となります。
5. 解答はすべて解答用紙の解答欄にマークしてください。「**基礎理科**」の解答用紙は2科目を選択し、科目ごとに決められた解答欄にマークしてください。3科目に解答した場合は0点となります。
6. 問題用紙の余白は計算に使用してもかまいませんが、解答用紙を汚してはいけません。
7. 試験開始後、問題用紙・解答用紙に落丁・損傷がないか確認してください。
8. 数学の問題の冒頭には「**解答上の注意**」が記入されていますので、必ず読んでから解答してください。
9. 試験終了後、問題用紙は持ち帰ってください。

# 国語

1 次の問い（問1～4）に答えなさい。

問1 ア～エの傍線部のカタカナに相当する漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つ選びなさい。

1、2、3、4

ア このまま少子高齢化が進むのがキテイ路線だ。

1

① キソンの仕組みを活かした取り組みが実を結ぶ。

② 人の弱みに付け込むような行いをキヒする。

③ 二国間の友好関係にキレツが生じる。

④ 世界に平和が訪れることをキネンする。

イ 文化祭でタイコを演奏した。

2

① 決勝戦の前にチームの士気をコスイする。

② 書類を整え、内定者とコヨウ契約を結ぶ。

③ 親元を離れた都会の暮らしてコドクを感じる。

④ 犯人はコイに銅像の位置を変更した。

ウ ヒゲしてばかりだと嫌味に映ることもある。

3

① ヒガの実力差はどうにも埋めようがない。

② わかりやすいと思い、ヒキンな例で説明した。

③ 内閣総理大臣が国務大臣をヒメンする。

④ 睡眠不足で神経がヒヘイする。

エ 減少した観光客数はゼンジ回復に向かっている。

4

① 台風で壊れた建物の屋根をシュウゼンする。

② 現ヘッドコーチに監督の座はゼンジョウされる。

③ 関係者が集まってゼンゴサクを協議した。

④ 地方への移住を検討する人がゼンゾウしている。

問2 ア・イの四字熟語の空欄 5、6 に入る漢字を、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つ選びなさい。

ア 会者 5 離

① 条 ② 常 ③ 定 ④ 情

イ 周 6 狼狽

① 賞 ② 章 ③ 承 ④ 障

問3 ア～ウの慣用表現の空欄 7、8、9 に入る漢字を、次の①～⑨の中からそれぞれ一つ選びなさい。

ア 画竜 7 睛を欠く

イ 卵の危うき 8

ウ 歯 9 にもかけない

① 我 ② 天 ③ 類 ④ 鶏 ⑤ 転

⑥ 点 ⑦ 牙 ⑧ 累 ⑨ 芽

問4 ア～ウに該当するものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つ選びなさい。

10、11、12

ア 梶井基次郎の著作 10

① 『檸檬』 ② 『雪国』 ③ 『日輪』 ④ 『蒲団』

イ 角田光代の著作 11

① 『葉指の標本』 ② 『八日目の蟬』 ③ 『永遠の出口』 ④ 『舟を編む』

ウ 「あめりか物語」などを著し、耽美派と目された作家 12

① 永井荷風 ② 小林多喜二 ③ 亀井勝一郎 ④ 吉行淳之介

## 2

次の〈文章Ⅰ〉と〈文章Ⅱ〉を読んで、後の問い（問1〜6）に答えなさい。

〈文章Ⅰ〉

芸術の理念として芸術を喚び起こして来るものは、古代ギリシアにおいては、有名なミメーシスすなわち模倣であるが、それは人間が見た形を、また聞いた声を、忠実に物質現象の上に再現する、ということである。ところで、その対象となるものは何なのであろう。(註)プラトンも注意している通り、ホメロスのような一流の詩人は、神々の通訳であるから、何をミメーシス（模倣的再現）するのかといえ、普通の人間には聞くことのできない神の言葉を聞いて、それを人間の言葉に模倣的に再現するといっているので、芸術とは神が体験する美しいものを、人間に可能な道具を使って模倣するという構造になっている。つまり、第一級の再現の対象となるものは神的なものである。ここに、<sup>A</sup>それ自体美であり真であるものが芸術の対象であるという考え方の基礎的な姿があるといつてよい。

この考え方は、今日でも妥当する。われわれは心理的、物質的には芸術家と同じような悲しみや景色を体験しながら、芸術家によってしか見えないそのものの美が、詩や絵の中に呼び出されてきているのを見て驚嘆するが、プラトン風に言うならば、芸術家はわれわれと同じ体験をしても、その際、その目や耳は神の思想の中に呼び込まれて、凡人の見えないものを見、聞こえないものを聞き、それを表わしているのだということにもなる。プラトンはそれゆえ、芸術家も「神の中にいる人」または「神がかり」(エントウシアスモス—*enthusiasme* すなわち熱狂に関係の深い語)の中に教える。ところで、一流の天才たちはそうであるとしても、二、三流の芸術家はどのようなものであるか。プラトンによると、彼らはむしろアイデアを模倣した影としての現象的存在者をさらに模倣的に再現するものとして、真理からは二重に遠い事物を制作する者にすぎなくなる。しかし、アイデアの影とは言いながら、現実存在する現象的存在者は、またそれなりの美しさや微妙な形を展開して、これをそのままに模倣的に再現し得たならば、それもまた素晴らしいことではないか。そのような技能をすべての人がもっているわけではない。

このようにして、<sup>B</sup>ミメーシスはいつの間にかアイデアのミメーシスというプラトンの考え方を去つて、現実を再現するリアリズムの根拠となつていった。そして、たとえばベルナルド・ベロツトすなわち通称カナレットと呼ばれる風景画家の如きは、ヴェネツィアの風景を描いて、どんな写真よりも正確ではないかと思われるほど、細かなリアスティックな描写を完成させた。これはある意味で、忠実なミメーシス（模倣的再現）の完成者だといってよいかもしれない。しかし、写真の一般化した現代、機械とその正確さを競うような外界描写は、いったいどれほどの意味があるであろうか。外物の模倣的再現は、人間の力よりも機械の方が正確に、かつ数多く、しかも短時間に完成させてゆくというの、いまさら言うまでもないことである。また機械自体が進歩して、その自律的な組織の中で或る芸術的效果を出すということになれば、自然の模倣などまったく意味がなくなるという事実は、音楽について最も明らかに言うことができる。

音楽も最初は風の音や波の音や小鳥の鳴声などの模倣と無関係であったとは思われない。しかし、機械自体が楽器の長足の進歩をもたらすと、楽器自体の自律的な音組織が、自然には存在しない美の世界を作り出していった。今日普通に音楽と言われるものは殆んどすべて外界の音響の模倣や再現ではない。

造形芸術についても、同じことが言えるであろう。もしも、人間の外在的対象とはまったく隔絶した人間の内面を、何らかの形で造形化しようとするときに、われわれは機械の介入を拒否する無形の心の動きを、機械とは違ったまったく独自の仕方では表現するほかない。それが芸術の使命ではなから

うか、と考えられるに至った。

このようにして、内的な世界の自己提示として、自己から絞り出すようにしてその感懐を物質の世界に投影するのが、芸術創作の新しい理念として登場してきた表現である。この表現に対応する言葉は、周知の通りに、古典ギリシア語や古典ラテン語ではなく、エクスペレシオ (expression) という言葉は中世のラテン語である。その当初の意味は果物の果汁を絞り出すという農業用語であり、意外に思う人がいるかと思うが、ゲーテの時代にも、ドイツ語ではまだ表現という語に当たるアウストルック (Ausdruck) という言葉すらなかった。表現は西洋の芸術思想に関する限り、十九世紀から二十世紀にかけてはじめて美学上の市民権を獲得した現代的理念にすぎない。

そうみてくると、西洋に関する限り、芸術の正統的な古典的理念はミメーシスすなわち写生であり、機械の写生力の発達につれてこれに挑戦して芸術独自の次元を開拓するという形で、内的世界の表現という現代的理念が必然的に現われてきたとみることができる。このような主観的な表現という考え方で、すべての芸術を説明しようとすると、芸術とは一種の叫びにすぎないということにもなる。たしかに二十世紀の芸術運動の中には、単なる自己表現としておよそ美とか技術とかには無関係であるようなものも芸術であると強弁する風潮もある。そこで、客観的なミメーシスと主観的なエクスペレシオンの長所を各とつて一種折衷的にはなるが、デュフレンヌという学者は、客観的表現が芸術の理念であると主張する。それは自己の主観を絞り出すという従来の表現ではなく、芸術とは客観的な存在者の可能性を絞り出して完成させること、いわば存在者のインテグレイション (補完) が芸術の理念であるとする考え方とみることができる。

芸術を対象の可能性の完成であると考えれば、もはや芸術は、あらかじめ出来上っている対象の外形的な模倣ではなくなる。したがって、等しくレアリズムであるといっても、もはや単なる対象模倣ではなく、またアイデアリズムであるといっても、単に自己の内面の表白ではなく、ここにある意味で両理念が止揚 (相反する対立者の両方を生かしてより高次の第三のものを引き出すこと、ヘーゲルの弁証法的展開の用語) されて、新しい芸術の理念が成立したとみられることもできる。

しかし、そうなると、出来上った芸術作品の形態的完成に対して、そこに至る生成の過程の方に視線がひかれるということも考えられる。なぜかという点、作者が対象のいかなる点に注目し、いかにして対象の可能性を引き出してくるのかという過程の方がある意味で内容的な興味を示すからである。これがまた完成した作品とは違った動的な魅力を豊かに示すということにもなる。このような思想的な背景があればこそ、未完成の作品であるデッサンが、今世紀になってから芸術の一ジャンルとして認められるようになった。

もちろん、デッサンについての顧慮とか重視は、すでにルネッサンス以後なかったわけではないが、それらは、いずれも下絵としての意味しかなかった。ところが今日では、その意義は、必ずしも準備という前段階的な意味に止まらない。<sup>D</sup> それは独立の作品としてあつかわれている。

(注) プラトン——古代ギリシアの哲学者。美や善などの概念から身の回りの物まで、すべてのものに最も理想的な姿 (アイデア) があり、アイデア界という完全な世界があるとするアイデア論を提唱した。

## 〈文章Ⅱ〉

芸術の理念は、大別すれば、このように再現と表現との二つに限られる。しかし、前者の場合、それが物質に傾斜した形をとると、単なる現象的事物の自然主義的描写に落ちてしまうが、本来再現は事物の描写ではなく、事物の原形としてのアイデアを写し出そうとするのであって、現象の描写ではな

く、神秘的な超越者を志向していたことは忘れてはならない。また後者の場合、それが心理に傾斜した形をとると、不安定な個人的感情の起伏を吐露するという形に落ちるであろうが、しかし、本来、表現はその主体の誕生以来、流れ入り流れ去っていった物質の新陳代謝を経過しながらも、つねに変わることなく、自己同一を保ってきた人格の主張を明らかにしようとするものである。それゆえ、表現もまた必然的に、物質では決して律しえない  としての精神の神秘に関わっていることになる。したがって、いずれの理念をとるにせよ、その本来的志向に従えば、芸術はその制作の理念に関する限り、存在の神秘を究極の相手とする営みにほかならない。

（〈文章Ⅰ〉〈文章Ⅱ〉はともに、今道友信『美について』による。）

なお、本文中に一部省略したところがある。）

問1 傍線部A「それ自体美であり真であるものが芸術の対象であるという考え方」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

13

- ① 芸術とは、人間が体験する美と真を、神が体験する美と真だと仮定して、普通の人間が見聞きできる形で物質現象の上に再現するものであるという考え方。
- ② 芸術とは、本来、人間が体験すること自体が唯一の美と真であるはずだという考えのもと、人間にしか見られない姿を忠実に物質上に再現するものであるという考え方。
- ③ 芸術とは、神の思想の中に呼び込まれているあらゆる人間が見聞きすることのできる美と真を、物質現象の上に再現するものであるという考え方。
- ④ 芸術とは、人間には聞くことのできない神の言葉を、その美醜や真偽にかかわらず忠実に再現し、美と真を普通の人間が理解できるものにするものであるという考え方。
- ⑤ 芸術とは、人間を超越した美であり真である存在の神が体験するものを、人間に可能な方法で忠実に物質現象の上に再現することで美や真を表現するものであるという考え方。

## 問2

傍線部B「ミメシスはいつの間にかアイデアのミメシスというプラトンの考え方を去って、現実を再現するレアリズムの根拠となっていた」とあるが、これはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

14

- ① 現象的存在者は、アイデア自体を表現するものではなくアイデアを模倣した影にすぎないが、その存在の美しい形相を忠実に模倣し再現することが、現象的存在者の内部に潜在しているアイデアそのものを顕在化させると考えられるようになったから。
- ② 現実存在する現象的存在者は、アイデアを模倣した影であるため、それなりの美を備えており、その美を忠実に再現するレアリズムの技能もまた稀有なもので、その技能に価値が置かれるようになったから。
- ③ 現実存在する現象的存在者の美しさの淵源であるアイデアを再現することはできなくとも、その美しさを模倣的に再現するレアリズムによって、アイデアや神の世界に限りなく近づくことができるという信仰的な価値が認められるようになったから。
- ④ 普通の人間には見聞きできないアイデアを、模倣する形で目に見える現実世界に忠実に再現するというミメシスの考え方が浸透した結果、アイデアよりも現実世界をそのままに正確に再現するレアリズムの方が価値があると考えられるようになったから。
- ⑤ ミメシスという理念は当初より、芸術はアイデアを模倣的に再現することにその使命があるのではなく、世界の万象を可視のままに忠実に再現することにその使命があるという思想に基づいていたから。

### 問3

高校生三人が、傍線部C「デュフレンヌという学者は、客観的表現が芸術の理念であると主張する」について話し合った。〈文章I〉の内容を踏まえ、〈会話文〉中の空欄に当てはまるものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

15

〈会話文〉

生徒A：デュフレンヌの主張する「客観的表現」という考えを理解するのが難しいな。

生徒B：「客観的表現」については、ミメーシスとエクスプレシオンの各々の長所を折衷したものだ、というところから考えてみるといいんじゃないかな。

生徒C：そうだね。ミメーシスは物質世界の客観的な模倣再現、エクスプレシオンは内的世界の主観的な表現で、デュフレンヌの言う「客観的表現」は両者の折衷というのであれば、それは客観と主観という二つの要素、両方から構成されていることになる。

生徒A：なるほど。筆者は、客観的表現を「自己の主観を絞り出すという従来の表現ではなく、芸術とは客観的な存在者の可能性を絞り出して完成させる」考え方であるとしているね。

生徒B：そうだね。つまり、デュフレンヌの主張する客観的表現とは、ということになるね。

生徒C：だから筆者は「存在者のインテグレーション（補充）が芸術の理念である」と述べているんだね。

- ① 客観的な存在者の模倣的再現の過程においても、主観を鋭敏に作用させ続けるというディレンマ的な手法を駆使すること
- ② 自分の内部にある美なるものや表現を表出することよりも、目の前にある物質世界や他者の視点など客観的な視点を優先すること
- ③ 自己の主観を絞り出すという従来の表現の理念を全て捨て去り、客観的な存在者にも等しく備わっている主観のみを駆使すること
- ④ 単なる対象の外形的な模倣でも、自己の主観の表白でもなく、対象の本質的な美を感得して表象すること
- ⑤ 自己の主観を絞り出すという発散を志向するのではなく、客観的な存在者が本来的にもつていない要素の補完を志向すること

問4 傍線部D「それは独立の作品としてあつかわれている」とあるが、これはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

16

- ① デッサンは、芸術を対象の可能性の完成と考えれば、作者がどのような視点から対象の可能性を引き出しているのかという芸術作品の形態的完成に至るまでの過程を魅力的に示してくれる点で、それ自体が価値をもつものであるから。
- ② デッサンは、作者が、対象のいかなる点に注目し、いかにして対象の可能性を引き出しているのかの過程を鑑賞する人に提示している点で、優れた絵画を描くための普遍的な方法を示唆してくれる、独立した価値をもつものであるから。
- ③ デッサンは、ルネッサンス以前は、表現技法の未確立によって、単なる準備段階の下絵とみなされ独立した価値は認められなかったが、ルネッサンス以降はその方法が洗練され、下絵自体が表現としての価値をもつものになったから。
- ④ デッサンは、単なる対象模倣ではないリアリズムと、単に自己の内面の表白ではないアイデアリズムという両理念が止揚され、新しい芸術の理念が成立したことを証明する特別な価値をもつものであるから。
- ⑤ デッサンは、出来上った芸術作品の形態的完成に対して、そこに至る生成の過程の方に興味を示す近代的知性にとっては、必ずしも準備という前段階的な意味に止まらない独立した価値をもつものであるから。

問5

〈文章Ⅰ〉の内容を踏まえたうえで、〈文章Ⅱ〉の空欄に入る表現として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

17

- ① 感情の渦
- ② 実存の核
- ③ 意志の鍵
- ④ 存在の波
- ⑤ 自然の芽

## 問6

〔文章Ⅰ〕〔文章Ⅱ〕で筆者が述べている内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

18

- ① 物質に傾斜し現象的事物の自然主義的な描写を重視する再現も、その描写により写し出さうとしていたのは、もともとは事物の原形であるアイデアであるため、一貫して神的・超越的なものを再現することを志向していたという点を重視すべきである。
- ② 音楽と言われるものは本来は風の音や波の音など、神的な領域にあるものを人間の力によつて忠実に写し取ることが目的とされたが、楽器の進歩がもたらした楽器自体の自律的な音組織によつて、自然には存在しない新しい美の世界を生み出すことに成功した。
- ③ 芸術の理念は再現と表現に大別されるが、芸術を対象の可能性の完成であると考えれば、芸術は人間を超越した完全なアイデアの外形的な模倣ではなくなるため、再現に価値が全くないわけではないしろ、芸術の理念を再現ではなく表現だと考えるのが妥当である。
- ④ 芸術には、事物の原形としてのアイデアを現実的事物に写し取る再現という側面と、自己の内的世界を表現する表現という側面があるが、どちらもその制作の理念に関する限り、存在の神秘を対象として、対象の可能性の完成をめざす営みであると考えられる。
- ⑤ 芸術は実際に見聞きできないアイデアを写し出すものであるという考えから、現実的事物の再現という側面が軽視され、自己の内面の表白や内的な表現が重視されてきたが、事物を客観的に観察し忠実に写し取ることによって人間を超越した神的な対象に近づくことができる。

## 3

次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えなさい。

料理人の李青（「俺」）は、自分の仕事に誇りを持ちあまり、レストランの従業員との間に不和が生じていた。ある日、共に働くモネが、姉のエミをレストランに招いたことをきっかけに、李青はエミの店を訪れることになった。

エミがひとりでやっているちいさな店「mame」は、その名の通り豆料理の店だった。

モネに教えられて、初めてそこを訪れたのは、初対面からほんの数日後のことだった。元は鰹節屋だった町家を改装した店で、間口は小さく、道に面した窓には格子戸がついていた。店の前でしばらく迷ったあと、意を決して扉を開いた。

白い漆喰壁と板張りの床。こぢんまりした空間に足を踏み入れるとまず、ど真ん中にある赤みがかった一枚板のダイニングテーブルが目をついた。鰹節の血合い部分のような色だと思っただけは、元鰹節屋だったという事前情報のせいかもしれない。八人から十人は座れそうなそれは、ちいさな店にはミスマッチなのに妙に馴染んでいた。

その他には、二人掛けのテーブル席が二つあるだけ。そっけないほどシンプルなところが、かえって落ち着いた空気を作っていた。営業開始時刻になったばかりだからか、まだ客はいなかった。

何かを煮込む、いい匂いがただよっていた。玉ねぎやトマトやハーブが、時間をかけてやわらかく溶け合っていく匂い。食べ物の匂いでほっとするといふ自分の反応に、戸惑った。あまり馴染みのない感覚だったのだ。

店の奥、狭いカウンターの向こうにあるキッチンには、板張りされたクローズドで、客の様子を窺ってサービスを行う店ではないことがうかがえた。右側にある出入り口には生成りののれんが下がって、腰の高さのバネ式扉がついていた。

こちらの存在に気づいたらしく、キッチンから聞こえる作業音が止まった。近づいてくる気配に、鼓動が速くなった。緊張なのか恐れなのかわからなかった。

「こんにちは」

顔を出したエミに声をかけられたとたん、それまでの透巡が消えた。表情も言葉も愛想はないのに、なぜかこの場に受け入れられていると思わせる佇まいだった。

黒板を見て注文した日替わりのセットが、ほどなくしてテーブルに運ばれてきた。ハモスと薄切りのバゲット。レンズ豆のサラダ。スープ寄りの黒っぽい煮込み料理。

拍子抜けするほどふつうの料理だった。たしかに「俺すこいだろ」とは言っていないだろうが……。戸惑いながら、食事を始めた。

そして俺はエミの言葉の意味を、その料理を通じて否応なく知ることになった。

まるで食材同士が自ら出会って自然とこの形になった、と思えるくらい、人が調理したということを感じさせなかった。

いつも人が作った料理を食べるとき、内心で細かく批評する習性があった。このソースにからめるならアスパラのゆで時間はあと十秒短くするべきだ、コースの構成がうまくない、もっと身の締まった小ぶりの鰹を使うべきなのに、等々。ただエミの作ったものに批評の余地なんてなかった。というか、批評やレビューというものからもっとも遠いところにあるような気がした。

<sup>b</sup> 水のように体に馴染む。こんなに研ぎ澄まされたシンプルというものがあるのか。

どうしてこんなに単純に見えるのに、言語化できない情報が一瞬にして、高い次元で伝わってくるのか。どういうからくりで生み出しているのか、まるで読めなかった。たとえるなら、ずっと西洋画

を描いていた画家が初めて水墨画に出会った衝撃のようなものだった。

「ごちそうさまでした、のあとに続く適切な言葉を思いつかず、

「<sup>A</sup>キッチンを見せてもらえませんか」

なぜかそう口にしていった。

エミがわずかに <sup>B</sup>眉根を寄せた。

「どうして？」

「どんな場所で生み出されたのか見たいんです。これまで体験したことない料理でした」

自分でもおどろくことに、俺は「お願いします」とまで口にしていった。

「俺のことは気にせずやることを続けてくれていたらいいです。ジャマにならないように端にいますから」

「モネ以外が入るのは嫌なんです」

そう言うってからエミは、ふっと俺から視線を外した。 <sup>B</sup>口から出た自分の言葉を見つめるような仕草だった。

「……でも、ほんの少しなら」

エミのキッチンは、 <sup>C</sup>静謐だった。

食材たちを真剣に見つめ、かつて生きていたことを損なわないよう注意深く手を動かし、新しい生を授ける。純度の高いその積み重ねが、ひっそりとそこに在るのがわかった。

何かが張り詰めている。それは同じなのに、 <sup>C</sup>エミが料理をおこなう場所は戦場ではなく、<sup>D</sup>宗教的な場所のようだった。

元々、改装からモネとふたりでやっていった店だったらしい。オープンからしばらく経って、モネが旅に出ることになり、エミだけの場所になった。確かにこのキャパシティはひとりで十分回せる規模だろう。

料理をするエミの動きは、これまで見たどんな料理人とも違った印象だった。最低限の動きに気迫があった父親とも違う。世界最高峰のスペインのレストランで働いていたキッチンスタッフたちの、早送りの映像のようなきびきびして無駄のない動作とも違う。

どう形容すればいいのか、わからなかった。わかるのは、言葉にならないもどかしさゆえにずっと目が離せなくなるということだけだ。エミが包丁で野菜を切る音とリズムが心地よく、ずっと聴いていたくなる。

キッチンシェルフに並んだ保存瓶に入った何種類もの豆が、シンクに向かって手を動かしているエミを見守っているように見えた。

エミは豆を洗い始めた。

「どうして豆料理なんですか」

キッチンの調和を壊さないようおそるおそる出した自分の声が、ずいぶん頼りなく聞こえた。

エミは一瞬、作業を続けるか迷うようなそぶりを見せてから、潔く手を止めた。

「どんな宗教と文化を持った人でも食べられるタンパク源だから」

「なるほど」

豚肉やウナギ、タコ、ハラル認定のない肉魚を食べないイスラム教。牛や豚を食べないヒンドゥー教。厳格な仏教は完全菜食だし、他にも俺が知らない禁忌を持つ文化はたくさんあるだろう。

博愛主義めいた言葉は、人と馴染めなそうなエミから出るのが意外な気もしたけれど、さっきの料理を食べた後だとすんなりと受け入れられた。

「栄養価も高いし、腹持ちも良いし保存もきく。栽培も難しくくない。これほど人間を救う食べ物はないかもしれないですね」

俺の言葉を聞いて、エミの目に「そうそう！」というようなきらめきが走った。食の世界共通語があるとしたら豆だと思う、とエミは言った。

「また来ても……」

口にかけて、

C 「通つても、いいですか」

と言ひ直した。なぜ共通語を探して、それを使おうとしたのか。どういう道を経てこういう料理を作るようになったのか。知りたい、と思った。

エミが微笑んだ。

D 「あなたが食べたいと思うなら、何度でも。それがわたしのやることだから」

d 大きな笑顔ではないのに、顔にはつと光が差したように見えた。

「姉さん、本当のことしか言えないんだ」。モネが言ったとおりだった。

素材の持っている性質をそのまま生かすように、エミは言葉も扱っていたのだと思う。言葉の持つ性質を勝手に加工せず、まっすぐに相手に届けようとしているようだった。言い換えれば、言葉そのものに敬意を払っていたのだ。だから、加工されたものばかり摂取してきた人間からすると、いささか処し方に困るものだったのだと思う。

エミは、テクニックとしての言葉の応酬や、人に与える印象を計算した態度、愛想笑いというものがまるでできなかった。それらが社会性と呼ばれている、建前やごまかしだらけのこの世界で、エミがこのまま生きてこられたことはある種の奇跡だと思えた。

俺は、常にエミの言葉を正面から受け止められる人間でありたいと願った。エミの料理を何度でも体に取り込みたいと思った。そうすることが、自分自身も、自分が作り出すものも劇的に変えてくれる予感があった。それがあまりに大きくて、その力に引きずられるようにしてエミとの距離を縮めた。つまりは、下心のある常連になった。

エミの料理を食べるようになって、俺は少しずつ、確実に変わっていった。

それは仕事を始める前の心持ちであったり、使う言葉であったり、完成度というものに対する概念であったりした。

もう少し大きな言葉を使うなら。

e 世界の見方そのものが、細胞レベルで変わっていったと言ってもいい。

エミへの気持ちは、どんどん大きくなっていった。エミの方も好意を持つようになってくれているように見えたけれど、許される距離感を間違えてあと一センチ近づけば突然ぱつと飛び退かれるかもしれないという、野良猫を相手にしているような緊張感が常にあった。

だから、伝えるべきかぎりぎりまで迷ったし、タイミングには細心の注意を払った。

承諾してもらった瞬間と、その後俺が初めて付き合う相手だと伝えられたときの、昂奮と誇らしさの混じった喜びは、忘れられなかった。

(宇野碧『キッチン・セラピー』による。)

(注) 「俺すこいだろ」とは言っていない——以前、エミは李青の料理を「俺すこいだろ」と言っているような料理だと評したことがある。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の語句の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。 19、20、21

(ア) 逡巡

19

① 不安  
② 緊張  
③ 疑い  
④ 躊躇い  
⑤ 蟻り

(イ) 眉根を寄せた

20

① 怪訝そうにした  
② 悲しそうにした  
③ いらだちをあらわした  
④ 意外そうにした  
⑤ 疑わしそうにした

(ウ) 静謐

21

① 静かで陰鬱  
② 静かで豊か  
③ 静かで空疎  
④ 静かで朗らか  
⑤ 静かで安らか

問2 傍線部A「キッチンを見せてもらえませんか」とあるが、李青はなぜこのように尋ねたのか。

その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 22

① 食材同士が自ずから出会い結びついたかのように調理したことさえ感じさせず、批評の余地もまったくない隙のないエミの料理ではあるが、料理が人為である以上、必ず何らかの技巧に裏付けられていると推測したから。

② 李青のこれまでの経験では、たいていのキッチンは、料理人が自分の料理を世に問うために挑戦を繰り返している戦場であるため、キッチンさえ見れば、エミの自意識が表れてくるのではないかと感じたから。

③ 調理したことさえ感じさせず、シンプルではあるが、言語化できない情報を高次元で伝えるエミの料理を食べて価値観が変わるような衝撃を受け、エミがその料理を生み出している場所を、見てみたいという衝動に駆られたから。

④ エミの料理には、多様な情報を一瞬にして伝達してくる複雑さと、研ぎ澄まされたシンプルさが共存しているが、エミがキッチンで料理をしている動きを見て、それらの要素の共存の秘訣を理解したいと思ったから。

⑤ 料理人としての豊富な経験を積み、あらゆる料理の構造は理解することができると思っていた自分にとって、まったく理解のきっかけも得られないエミの料理の得体の知れなさに畏怖を感じ、自分の中の恐れを拭い去りたかったから。

### 問3

傍線部B「口から出た自分の言葉を見つめるような仕草だった。」とあるが、このときのエミの心情を説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

23

- ① 自分とモネ以外の人を入れることを拒む言葉を口にしたことにより、自分が食材と料理について研究を重ねてきた大切なキッチンに、料理人という自分と同じ職業人を入れることへの潜在的な危機感が自分の中にあつたことに驚いている。
- ② 食材たちに新しい生を授ける場である大切なキッチンに、自分とモネ以外の人を入れることを拒む言葉を率直に口にしたが、李青の様子を思い返して、許容してもよいことかどうかを慎重に検討している。

- ③ 自分の人生で大切にしている食材の力を食べる人にそのまま伝える営みの場であるキッチンに、自分とモネ以外の人を入れること拒む言葉が反射的に出てきたことで、思いがけず自分のキッチンを大切にする思いを再認識している。

- ④ 自分の料理がどのような場所で生み出されたのかを見たいという、李青の真摯な気持ちにこたえるために、自分の生き甲斐である料理を生む場であるキッチンを、自分とモネ以外の人のために開放するべきなのかがわからず困っている。

- ⑤ 大切なキッチンに自分とモネ以外の人を入れることを考えたことがなかったため、つい李青を拒む言葉を口にしてしまったが、悪気のない李青に心ないこと言ってしまったことを後悔している。

### 問4

傍線部C「『通つても、いいですか』と言い直した」とあるが、このように李青が言い直したのはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

24

- ① おそらくエミは、生み出す料理や語る言葉から察するに、損得勘定からくる建前やごまかしを嫌う気質の持ち主であると感じ、まずは飾らない言葉で、自分の真摯な思いを丁寧に伝えることが大切であると考えたから。

- ② エミの料理だけを気に入って、再び食べに来るのであれば「また来ても、いいですか」で問題はないが、エミの料理だけでなく、エミ本人にも好意を抱いてエミのことを知りたいという気持ちがあつたため、自分の思いを重ねて伝えたいと考えたから。

- ③ エミのキッチンは、純度の高い営みが静かに積み重ねられてきた、いわば宗教的な場とも形容しうる場であるため、軽い気持ちで訪ねるのではなく、礼拝に通うように何度も真剣に通う必要があると感じたから。

- ④ 料理人である自分が、まったく見たこともなく、形容もできず、目も離すことのできないエミの料理をする姿に触れ、エミの料理の根源にあるものやエミ自身をもっと深く知りたいと感じ、何度もエミのもとを訪れたいと感じたから。

- ⑤ 料理をするエミの動きは、これまでに見てきたあらゆる料理人とは異なる新しい動きであり、料理の現場での経験が豊富な自分にさえ形容できないものであるため、その新たな動きを習得するためには、エミのキッチンに通う必要があると感じたから。

問5 波線部 a～e の内容や表現に関する説明として 適当でないものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

25

- ① a 「食べ物の匂いでほっとするという自分の反応に、戸惑った。」は、これまで李青がいた料理の世界では、食べ物はいわば競争のための武器であり、自分がその匂いでほっとするという、安らかな反応をしたことはなかったということ表現している。
- ② b 「水のように体に馴染む。」は、エミの料理の性質が、あくまで人が調理をしたことを意識させない次元のものであるため、それを食することは、あたかも身体が水を吸収するかのような抵抗のない自然で心地よいものであることを比喩で表現している。
- ③ c 「エミが料理をおこなう場所は戦場ではなく、宗教的な場所のようだった」は、エミのキッチンには張り詰めたものが感じられるが、それは他者との競争によるものではなく、食材に新たな息吹を注ぎ込むという純粋な思いによるものであることを表現している。
- ④ d 「大きな笑顔ではないのに、顔にぱっと光が差したように見えた。」は、エミが自分の歩んできた道に真剣な眼差しを注いでくれる人がいることを初めて知り、自分ひとりで歩いてきた困難な道を進む勇気がエミの心の中にわいてきたことを表現している。
- ⑤ e 「世界の見方そのものが、細胞レベルで変わっていった」は、李青の世界観が、エミの料理を介して、単なる理論や思想のレベルではなく、身体を含めた全存在のレベルで、深く変化したことを表現している。

問6 文章全体を踏まえ、エミの料理に出会ってからの李青の変化を説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

26

- ① 料理人の作る料理は、常に批評という攻撃に晒される宿命にあると考えていたが、批評の余地のないエミの料理の手法や世界観を自分も身につけることにより、周りの評価を意識することなく、穏やかな気持ちで自分の料理と向き合うことができるようになった。
- ② エミの料理にみられる研ぎ澄まされたシンプルさは、西洋画が有していない、水墨画に見られる性質そのものであると考え、自分を大きく立派に見せたいと思うあまりに複雑になり過ぎていた自分の料理を顧みて、新たに自分の料理を作り直そうと思うようになった。
- ③ エミが豆料理を大切にしている根拠は、豆は食の世界の共通語であり、誰もが食べる幸せを享受すべきであるという博愛思想にあることを知って、自分の心持ちや世界に対する考え方が大きく変わり、エミの理想を一緒に実現する同志になりたいと望むようになった。
- ④ 自分の料理を誇りに思うあまり、料理は自分の持つ技能を満遍なく注ぎ込み、自分の力を他者に示すものであると考えていたが、エミの料理が大切になっている食べ物や料理に対する愛情に触れ、料理は食べ物や食べる人のためにするものだと世界観が大きく変化した。
- ⑤ 食べる人に食材の生を伝える静謐な営みであるかのようなエミの料理に惹かれ、エミの料理と言葉を自分の中に受け入れることにより、料理に対する向き合い方だけでなく、使う言葉など李青を構成する考え方が、出会う以前とは全く違うものになった。